

---

# 東方災生変

DHMO

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方災生変

### 【Nコード】

N5350X

### 【作者名】

DHMO

### 【あらすじ】

博麗神社消失から十五年後、厄介な青年と厄介な相方が幻想入りする話。この話は稚作「東方魂合変」の次回作に当たる話です。出来が悪いですが前作の方もどうぞ

## XXX：そして赤い青年は（前書き）

初めての人ははじめまして。前作からついて来てくれた人はお待ちせしました。漸く第二部のスタートです

前作とは違って重暗い話になってしまいかもしれませんが、その辺りは申し訳無いです。楽しんでいただける様、心血注いでいきます。

それではプロローグをどうぞ

## XXX：そして赤い青年は

見た事の無い和風の家に、私は寝転んでいる。視界には茶色い木の天井。身体は指と目しか動かせず、自分で立ち上がる事も出来ない。

風が流れて涼しくて、草木の揺れる音が柔らかくて、心地良くて、今にも眠りに落ちてしまいそうだ。

けれど暫くすると、急に視界が動き出す。頭と胴の後ろに体温を感じた。誰かが私の事を持ち上げている様だ。がさつな扱いをされて、私の眠気は何処かへ飛んでいってしまった。

何時もの私なら不屈き者に御札の一枚や二枚投げてやるけれど、今の私はされるがまま。不快さが無いのがせめてものの救いだ。

浮かび上がっては元の高さに落ち、上がっては落ちる景色。どうやら、高い高いをされているみたい。これで喜べる赤ん坊と言える時期はとうに過ぎた筈なのに、とても楽しい。

この感覚が、私を支配している。この「空くうに浮く」感覚、「空そらを飛ぶ」感覚が、私の全て。

何故かは分からない。きっと、この時が私の持つ最初の記憶だから。

寺子屋に通う位の年頃だろうか。不思議な服を着た女の子が、朝霧で霞む長い長い石段の一番下に座っている。赤い袴を腕にくっ付けてる様な白い袖で覆っているのは、きっと膝を抱えているから。黒髪が俯いた表情を隠し、起きてるのか寝ているのかも分からない。だけど私には、何故かその子が寂しがっている気がした。

どうしたの？

私が声を掛けると、女の子は顔を上げる。その顔は、予想に反して不機嫌そうな顔だった。

誰？ なんの用？

ぶっきらぼうな声。ジトツとした目によく似合う声で、少し可哀しい。

私はマリサ。アナタは？

……レイム。で、なんの用なの？

レイムの隣に腰を降ろしながら、その問い掛けについて頭を捻る。無計画なのは私の悪い癖だ。取り敢えず、思い浮かんだ事を言ってみよう。

実は私、授業をサボったんだ。だから、その暇潰し。……暇潰しに話し掛けたの？

またジトリ。不機嫌なのを示しているのだろうが、どう見ても可愛い。ここで笑ってしまえば本格的に機嫌を損ねそうなのでグツと堪える。

けど、あなたも暇でしょ？

暫くの沈黙は、恐らく肯定の意だろう。まだ日が高いこの時間帯に外を出歩く子供はそうそういない。寺子屋での初等教育は必要、と解いて回った先生が昔いたらしい。今も存分に教鞭と額を振るっているだろう。

だとすれば、レイムは何故ここにいるのだろう。私の様にサボったのだろうか。

……博麗。

え？

今度は否定的な目つきは伏せられ、言葉だけで私に語りかける。

博麗の巫女ってだけで、なんでもかんでも詰め込まれるの。ほんと、バカみたい。

……ハクレイ、の、巫女……。

何処かで聞いた。幻想郷ココの管理者だとか、守護者だとか。およそ人間とは思えない性能の巫女。

レイムは、ハクレイの巫女なんだ？

見習い未満のね。先代巫女に拾われたのが運の尽き、だって。こちら赤ん坊の頃だったの。

大人びた振る舞いだと言うのに、頬を膨らませたりする仕草や表情は子供そのものだ。行動と言動と外見がミスマッチして、実年齢を計りづらい。

巫女って、スッゴい強いんでしょ？ 何が出来るの？

我ながら、分かり易く子供らしい質問だ。ブツブツと文句を言うレイムも、そんな質問で毒気を抜かれてしまったらしい。

少しだけだけど、飛んだり、御札書いたりとか、五行の初歩とか……

ゴギョウ？

聞き慣れない言葉に首を傾げる。うーん、と少しばかり唸ると、突然レイムが立ち上がった。長い黒髪と白い袖が揺れる。

こつこつモノよ。

何処からか取り出した紙片。ミミズがのたくった、と言うには少しばかり気品を感じる線が描かれていたが、そんな考えは次の瞬間に消え去った。

水生木、疾れ！

例えるなら、雷光の河。目の前の少女が構えたタダの紙切れから、白い奔流が産み出された。

これこそが迅雷、と言うのだろうか。大地を焦がす儚い光を眺めながら、自らの少ない語彙から捻り出す。

これが、私の原風景。

稲光に、『魔法』に魅せられた私が、この時生まれたんだ。

罪。

それは、自分の歩んできた道。

それが、自分の存在条件。

一生の苦楽を共にし、永遠に対峙する半身。

最初の罪を犯した時こそが、自分が世界に認められた時だった。

紅い霧に包まれ、非現実の帳が降りる幻想郷。

紅い風景を二人の少女は飛ぶ。

紅い眼の悪魔はそれを待ち構える。

紅い狗は刃を研ぐ。

紅い門番は眠りから覚めず。

紅い妖精達は何時も通り。

そして赤い青年は



XXX：そして赤い青年は（後書き）

いきなり紅魔郷スタート……と思いきや、次話からは主人公の過去  
→ 幻想入り前に視点を移します  
相変わらず書き貯めていないのでお待たせしてしまいますが、み  
んな待つてくれッ！

……この時点で主人公が分かった神がいるのであればメッセでお願い  
します。ネタバレは出来るだけ控えてーな

## 001：二種の来訪者（前書き）

第一部では直していなかった一字空けや行間詰めを実行してみたり  
そんな事の前に執筆速度と内容の厚さを兼ね備えたいと思った今日  
この頃皆さん如何お過ごしでしょうか

## 001：二種の来訪者

ある県、ある山間部の町の、それなりの高さの山の上に立てられた神社。それなりの縁起と御利益があるらしく、昔からそれなりに信仰されていた、らしい。

らしいと言うのは、正直自分では信仰されているのかどうかなんて分かったものではないからだ。担ぐ筈の御神輿は蔵で埃を被り、賽銭箱は閑古鳥の巢と化している。こんな現状では、本当に神様なんてモノを奉っていたのかどころか、宗教として成り立っていたのかすら怪しい。

社務所と居住区と本堂が重複してるし、そもそも御神体が無い。一応蛇かなんかの彫刻はあるけれど、子供の手遊びで出来たんじゃないかと思うぐらいの代物だ。

そんな訳で、休日にわざわざ来る様な物好きもおらず。

「……ふう」

二十歳の自分一人で勉学に勤しんでいても全く問題無い。誰か雇いたくても金が無いし、雇う必要が無いのが本音だ。

机上の参考書を一旦片付け、冷蔵庫の中から飲み物を出そうとする。生憎とお茶入れに入ったそばつゆしか無い、と気付いた時には吹き出していた。

口直しに常備している栗饅頭を出す。表面がなにやら緑色のモノに包まれていたのでゴミ箱に投げ入れる。

「……買い出しいくか」

生来の出不精が憎らしくなりながらも、高校のジャージから黒いシャツとジーンズに着替え、ポケットに薄い財布を入れる。誰が入れるかも分からない賽銭と肉体労働のバイトだけでは生活費も危うい。進学はまだまだ遠そうだな、と先程仕舞った参考書を思い溜め息を吐いていると

ピンポーン

「……………?」

来客を知らせるベルが鳴った。ここ数年使われて無いと言つのによく機能したものだ。などと関心している暇は無く

ピンポーン、ピンポーン

「はいはいはい、今出ますよ」

間髪入れずに二回の呼び出し音。早く玄関に行かなければこれ以上呼び出されてしまうだろうから歩行速度を上げる。

古びた引き戸を出来るだけ優しく開ける。新聞屋なら何時も通り断つてやればいいし、押し売りなら塩でも……そうだ、塩も買つてこなければ。

心の中の買い出しリストにペンを走らせつつ、自分呼び出した者を確認する。

「こんにちわ。京都の 大学『秘封倶楽部』のマエリベリー・ハ

ーンと申します」

「……はあ……？」

予想外、想定する事が出来ない範囲からの訪問者が現れた。

まず見た目。金髪の女性                      しかも自分と同年代                      な

ぞついで見た事が無い。それにそんな人が丁寧にお辞儀をしながら流暢に日本語で喋っているとは二重に驚く。端麗な顔立ちなら尚更だ。変なフリルの帽子とおばさんが着そうな紫の服は減点ポイントだが。

その後ろには、黒髪の女性。金髪女性とは違ってワイシャツにネクタイ、黒いスカートに黒い帽子と、白黒とした服装だ。どこなく男っぽく感じてしまうが、スカートを穿いているから女性だろう。

「あー……ええつと……大学の学生？    さんが、どうしてウチに？」

「えっ」

「えっ」

しどろもどろに問うと、奇妙な掛け合いの後に呆けた顔をする女性……ハーンさん。寧ろ呆けたいのは自分の方なのだが、と思っていると、確認する様にハーンさんが訊いてくる。

「あの……確か一週間程前に、電話で御連絡を差し上げた筈ですけど……。此方の神社についての取材をさせて頂けないかと」

……万年受話器に埃が被ってるウチに電話なんて掛かってくる事があつただろうか。間違い電話すら無いし、友人からの電話なんてものは掛かってくる訳が無い。

「あゝ、その事なんだけどさ、メリー」

バツが悪そうに頭を掻きながら、ハーンさんの後ろに立っていた対照的な日本人女性。二人の共通点と言えば、種類は違えど帽子を被っている事だろうか。

メリー……恐らくは愛称だろう。そう呼ばれたハーンさんは、黒髪女性の方に振り返る。一瞬だが、綺麗な顔立ちが歪んでいた様に見えた。

「蓮子……まさか」

「いや、連絡しなきゃなーとは思ってたんだよ？　だけどまさか連絡先書いた紙を無くしちゃうとは思ってなくてねえ。仕方無いからアポ無しでもどうにかなるかーって」

あれだ、良く言う割れ鍋に閉じ蓋と言うか、凸凹コンビと言うか、そんな感じがする。割れ鍋の場合は亀裂が致命的過ぎて、凹なら深すぎて底が見えない位だろうけど。何故か。ハーンさんのうなだれっぷりが似合い過ぎていたから。

「ハアア……確認しなかった私が悪いわね……」

長い溜め息を吐き終わると、恥ずかしそうに顔を赤らめて此方を向くハーンさん。咳払いで場を仕切り直そうとしても無駄ですよ。

「大変申し訳ありません。此方の不手際で連絡せずに伺ってしまい」  
「……その様で」

件の不手際の人は悪びれる様子は全く無く、口笛まで吹いて忘れようとしている。今時そんな誤魔化し方もどうだろう。

「いや、別に連絡云々は良いんですけど。一体、ウチにどんな用事があるんですか？」

先程言っていた『秘封倶楽部』と言う単語。部活……大学だとサークルか？の類なんだろう、多分。そのサークルの名前を出すって事は、サークル活動の一環で此処に来たと考えるのが妥当だ。とすれば歴史関連か、次点で日本文化関連か、無いとは思うが大穴、宗教関連か。

「それについては私、宇佐見蓮子がお答えしまっす！」

僕の疑問を聞きつけると、さっきまでぴーひゃらと口笛を吹き鳴らしていた女性がいきなり食いついてきた。

「私達『秘封倶楽部』はメンバーは二人だけど、良くあるただの霊能者サークルッ！但しッ、霊能者サークルだけど除霊や降霊とかは行わないッ！周りからはまともな霊能活動をした事のない不良サークル、と思われてるがその実態はッ」

ヤケに熱血口調な割れ鍋が取り出したのは紙の束。差し出されるままに手に取り、まず一枚目に書かれた文字を見る。

「……幻想郷？」

「そうッ！我々の目的はその妖怪の隠れ里、幻想郷を見つける事であるッ！」

かつての日本には、いや世界中には幽霊や妖怪、妖精、神様の類がいた。それを否定するには否定出来る証拠は無いし、肯定するには材料が多過ぎる。

だが現代において彼らの目撃情報は余りにも少ない。かつては共

に杯を交わした鬼は消え、圧倒的な力を誇る天狗も失せた。

何故、今現在彼らは存在しないのか？ 死滅したのか、隠れているのか、そもそもいなかったのか。

これらの謎を解く鍵は、各地の伝承に残っている 以上、

『秘封倶楽部報告書：幻想郷』序文より抜粋。

「……お二人が此処に来たつて言うのは、まさか……」

「はい、此方の すいか 水香神社の文献を、どうか拝見させて貰えないかと」

流石に立ち話を続ける雰囲気では無くなったので、応接間兼本堂にお二人を通す。粗茶と先程のレポート、菌糸の魔の手から唯一免れた柿ピーを載せた机を挟んで、詳しい事情を聞く。

なんでも彼女達、三百年以上前に書かれた外国の書物『幻想ノ郷』（日本語訳）のみを手掛かりに、大学でその研究をしているのだそう。『幻想ノ郷』（日本語訳）とやらは読ませて貰ったが、どうにも荒唐無稽なファンタジー図鑑にしか思えない。真つ赤な館に住まう吸血鬼夫婦、モンスター妖怪が支配する山、幽冥に漂う桜、それらを管理する妖怪、巫女。訳が分からないし理解出来ない。

確かに夢物語にしては細か過ぎる。かと言って決定的な証拠にはならない。何故ならこれは

「ご無礼を承知でお願いします。どうか」

「い、いえ、そんな。頭を下げられても……」

中々返答を寄越さない僕に深々と頭を下げる二人。しまった、そんなに渋っているのでは無いのだが。



「多分、古書の類なら蔵にあると思います。お見せするのは勿論構わないです」

その言葉にパツと顔を明るくする二人。ガッツポーズやハイタッチをどうにか抑えている宇佐見さんを横目に、ハーンさんはまたお辞儀をする。

「……その前に。少し、質問して良いですか？」

晴れやかな顔の二人に訊くには、少し悪いかもしれない質問。けれど、僕にはどうしても訊かなければいけない質問。

「その……お二人は、所謂、霊能的なものを信じているんですか？」

「……ん〜？」

初めて、の筈。だけど見覚えと言うか、感じた覚えのある空気。外見は違っていても、此処の土地は印象が強過ぎる。

気の向くまま足の向くまま進んでいたけれど、今度と言う今度は終着点かな？ 前みたいに変な棒を投げられたらやだけど、そこはプラス思考プラス思考。

「そつだとしたら……まずは腹拵え！ すんませーん、一番良い料理を！」

「らっしやいッ！　ウチのは全部が全部旨いよッ！」

料理人のあんちゃんの御託を聞いていたせいか、どんな店でも安牌のカレーに行き着くまで二十分掛かった。海無し県の癖に浜茶屋のカレーの味がしたのはきつと気のせい。

## 001：二種の来訪者（後書き）

とゆー訳で、初登場の原作組は秘封倶楽部のお二人でした  
……と言っても、別に未来な要素は全く無いですがね。現代に二人  
がいたら、的な感じで話は進んでいきます。あしからずー

002:一人+一人〃? (前書き)

何日も待たせてごめんなさい  
出来が良くなってごめんなさい

土下座

## 002：一人＋一人？

水香神社、客間兼社務所。昼前までは何時もの風景だった筈が、今ではカビと埃の臭いと大量の紙が占拠し、目も当てられない光景となっている。後々の掃除と消臭剤を売っている店への道順に脳を使いながら、蔵から持ってきた古紙を僅かに見える床へと置く。

「ウチにある本はこれ位です。道具の類は蔵から出しづらいので…」

「後で蔵の中を拝見しても宜しいですか？」

「ええ、勿論」

古書まみれな部屋の中で、一心不乱に作業をする二人、マエリベリー・ハーンと宇佐見蓮子。二人共々同じ顔、同じ眼差しでページをめくり、ペンをノートに走らせる。

別に、彼女達を笑うつもりは無い。僕が見た事が無いから、知っていないから、彼女達の言う事が嘘だと言う事は無いし、否定なんてする気は無い。

だが、それは認めるについても同じ事。彼女達の言う事を真実とする事も無いし、認める筈が無い。

結局、僕にとってはどちらでも良いのだ。彼女達が信じているモノがあったとしても、それは僕には関係無いのだから。だから蔵も開放したし、面倒で無ければ手伝いもする。

「あ、買い物忘れてた」

軍手を外して一息ついていたら、ふとゴミ箱の中の青カビの塊が目に入り、来客前の出来事を思い出した。しかし、今出てしまえば客人のみを残す事になる……

「……別に構わないか」

あの二人なら、物取りなんかしないだろう。古書なら引き取ってくれるのがありがたいし、金目の物は既にポケットに避難済み。何よりいきなり押し掛けてきたのは向こうなのでどうこう言われる筋合いは無い。

集中している二人に声を掛けるのは気が引けるので、静かに玄関へと向かい靴を履く。

……別に声を掛けるのが怖かったり面倒だったりする訳では無い。断じて違う。

腹拵えを済ませ、ぶらぶらと街中を歩いてみる。手に持った旅行鞆を持ち替えながら思索するも何も浮かばないのが現状だ。目的はあるにはあるけれど、別に急いで済ませる事でも無い。

「暇なんだよねえ……」

やる事があってもやらない。やる気にならない。だからと言って何かやる訳でも無い。

他人から見たらぐーたらなんだろうけど、本人からしてみたら大変な事だ。俗に言うには……なんだろう、仕事や勉強が手に付かない、  
つてのが今の状況か。

「うーん、さっさと行くうかなあ？」

時代に取り残された、と言えば大袈裟だ。だけど、この村にも今の時代にそぐわないモノが残っている。

信仰。信心。神氣。神力。或いはその類。いや、此処だからあるんじゃない。此処は変わらないから残ってるだけなんだ。

神社の行事が盛んに行われている訳じゃないだろうけど、他が無くて尚且つ疑っていないから、こんなに残っている。

「……まあ、全部憶測だけどね」

独りごちていると、何時の間にか長く細い階段の下にいた。生い茂っている木々や長年踏み続けられていた石段を見る限り、目的地に相違無い様だ。

山頂へと続くバリアフリーなんかとは無縁の悪路。入り口付近の看板には『水香神社』と書かれている。

「……いっち、ちっちと行っつー!」

何を迷っていたのか自分でも分からないけれど、とにかく進む事にした。旅行鞆を背中に回し、古びた階段を勢い良く駆け上がった。

「え？」

下って来ていた青年に気付かない程、張り切って。



002:一人+一人〃? (後書き)

次話から話が進む…… 筈

003: ? + 二人 〃 三人 + 独り (前書き)

昔に戻ったような文字数

まずは更新ペースを崩さないようにしよつと

# 003：？＋二人〃三人＋独り

鈍い音が二、三回した気がする。確実な一回は、いきなり下から登ってきたナニカが腹に当たった音だろう。

なんとか倒れるのを堪えても、今度は腕をナニカに掴まれる。予想外の加重によって元から無いような体幹はあっさりと折れ、共々転がり落ちた。

「いッ、たぁ……………」

「……………」

どういった経緯か分からないが、上段にいた筈の僕が下段から上がってきたナニカの尻に敷かれている。地獄車じゃあるまいに。

「あ、君大丈夫？　ごめんね、いきなり頭突きなんて食らわせちゃって」

声から察するに、ナニカは女性の様だ。行動からも分かるが、元気が有り余るタイプの。

「………… ホントに大丈夫？　息してるかな」

「………… 無事を確かめるなら、まずどいてくれるかい」

ベタベタと身体のアチコチを触ろうとする手を払いながら、上体だけ起き上がらせる。女性も漸く気付いたのか、僕の下半身を椅子代わりにするのを止めた。

「どこか怪我とかしてない？　してたとしても何も出来ないけど」  
「……………平気だよ。うん」

立ち上がり身体に付いた土埃を払いながら、突撃してきた女性を見る。

真冬でも無いのに分厚そうな外套。凹凸も隠れる服装に身を包んだ、銀色の髪的女性がそこにいた。ハーンさんと言い、この女性と言い、目立つ髪色を二連続で拝むなんてどういう日なんだろう。

「まあ本人がそう言うならいいけど」

僕の無事だと分かると同時に、一緒に転がり落ちたらしい旅行用のトランクケースを手取る。どうやら、無駄な心配はしない質のようだ。

会釈をして再び階段へと向かおうとした女性が「あっ」と声を出して振り返る。

「君、この上の神社について何か知らない？　どんな神様が奉られてる、とか。どういう神主がいる、とか」

……………？　なにか妙な噂でも立っているのだろうか。一日の内で二回も神社について訊かれるなんて、珍しい。

「何を奉っているかは知らないけど、神主なら知ってるよ」  
「へえ、どんな……………ッて、やっぱり怪我してるじゃない」

白い指が指していたのは、僕の左のこめかみ辺り。それに気付く事で、漸く顔の皮膚が触覚を取り戻していた。

頬に、熱い液体が流れている。胸中の鼓動を感じ取りながら手で

拭って見てみると、指先が赤く染まった。

これは

「ハア、仕方無い。絆創膏貼ってあげるから、頭出して」

「あ、いえ、大丈夫なんで。ホントに」

足早にその場を去る。まともに服の埃も払ってないが、そんな事はどうでもいい。

「ちよつ、待って！」

呼び止める声を見捨てて細い道へと駆け込む。此処辺り一帯は自分の庭、と言う訳では無いが、余所者を撒く位なら簡単だ。

塀を潜り、廃屋を抜け、小道を曲がりくねる。五分程走っただろうか、壁に寄りかかり一息つく。心拍数はまた上がっていたが、心の方は落ち着いていた。

「最近は何事もない様に気を付けてただけだな……危ない危ない」

ハンカチで血と汚れを乱暴に拭く。摩擦熱を感じるまで擦ったが、傷への痛みはもう無かった。

虫の音が響く境内。夏から秋への移り変わりを感じさせる涼しさと騒がしさは、室内にいても感じられる。

「へえー、色んな神社を回ってるんですか」

「そそ。この前行ったのは……なんだっけな。変な棒と注連縄しか印象に残ってないや」

「神社ですか……少しお話を聞かせて頂いてもいいでしょうか？」

「いいよー、私の話で良ければ。けど敬語は止めてね、なんかくすぐったいし」

「そーそー、メリーったらいつも畏まっちゃって。もっとフランクになるうよ」

……後ろから聞こえてくる笑い声さえ無ければ。女三人寄らば姦しい、とはこの事だろう。

「おーい、なきひと凧人クンもこっちおいでよー。独りで飲んでないでさー」

「僕は良いんで、三人でどうぞ」

三人の内、宇佐美さんが幽夜ゆいさんが呼んでいる。酒飲みに絡まれるのは勘弁なので適当に返す。

本堂の戸を開け放ち、賽銭箱の隣で買ってきた栗羊羹をかじりながらお茶を啜る。家主だと言つのに肩身が狭い。ノーと言える日本人になりたいと思う秋の月下。

003: ? + 二人〃三人 + 独り (後書き)

どうなったかの経緯は次話で書きます

004：帰り道、帰る場所にて（前書き）

地味に連日投稿  
短いけどね



## 004：帰り道、帰る場所にて

右手の袋には牛乳と栗羊羹とお茶葉、それと今晚のおかずの店屋物。左手のバケツには芳香剤と脱臭剤と乾燥剤。幾らか軽くなった財布の重さに不安を覚えながら、大通りを歩く。

はて、大学の二人はどうするのだろう。宿を取ってるのなら夕餉の準備は何時も通りにするが……いや、流石にそこら辺はしっかりしているだろう。うん。

不安なのは先程の銀髪女性。ただの参拝客ならいいが、どうにも気になって仕方がない。

玄関の鍵は一応閉めてあるが、本堂の鍵は開けっ放しだ。物取りではなく大学生二人の方が心配……しなくていいか。荒らされたら片付ける苦労があるけど、それぐらいだし。

「……さて」

200段はあろう石段の0段目、事故現場に舞い戻った。上<sup>家</sup>で何事も無ければ良いなあと祈っていた自分がいて、何を危惧しているのかと自嘲する。

水香神社への階段、218段目の広場……つまりは境内。灰色の鳥居を潜りながら、玄関へと向かう。

「……開いてる」

分かり易く、開け放たれている引き戸。家を出た時には間違い無く閉めていた筈だ、鍵だつてここに

「  
」

右ポケット、薄くなった財布。

左ポケット、レシート。

尻ポケット、埃。

落とした？ けど落とす様な事なんて……心当たりと言うか確実な原因があつた。

もしかしてもしかするとあの銀髪女性が鍵を持って入ったのだろうか。いや、それは飛躍し過ぎだ。あの女性の何を気にしているんだ僕は。

荷物を置いて靴を脱ぎ、手近な箒を手取る。念の為だけれど、本当に危険な事があつたら何の役にも立たないだろう。

人の気配、なんてものは分からない。だけど、明らかに静か過ぎる。

箒を握る手に力を込めながら、廊下をゆっくり歩く。まずはハーンさんと宇佐見さんがいる筈の居間へと向かつてみる。

「……………」

パラパラと本を捲る音が廊下まで聞こえてくる。けれど、そのスピードがなんだかおかしい。まるで本をひっくり返して捲っているような……とにかく、読んでいるスピードでは無い。

予想通り。窓と本堂の戸は開け放たれ、古書の香りを外へと追いつ出していった。

「二人共……帰った訳じゃなさそうだな」

二人の帽子は、帽子掛けに掛かったままだ。

つつかけを履いて本堂から出る。室内に彼女達がいらないなら、残すは一つの場所しか思い当たらない。

薄汚れた漆喰の壁。飾り気の無い蔵の扉は開いたままだった。近づき、中からの音に耳を澄ます。なにやら話し声が聞こえるけど、内容までは分からない。

「よし」

簾を後ろ手に持ち、蔵へと踏み込む。

薄暗いその蔵の中。一点が光で浮かび上がっていた。  
そこには二人の少女と、一人の旅人と　　が立っていた。

「（……………人形……………？）」

三人に声を掛ける前に、その異常な光景に目を奪われた。恐らくその場に居る全員が心を掴まれただろう。

飾り気の無い、巨大なデッサン人形。何故蔵にあるのかも分からないパペットが、漏れた光の中で踊っていた。

踊り 剣舞と言うべきか。粗野で乱暴な振り回し方しかしていないが、それがまるで雑兵を薙ぎ倒す武将の様な猛々しさすら帯びている。

「……さっきの君。やっぱりここの関係者だったんだ」

異質。異様。非常。非現。忘れかけたこの空気。

舞いが終わると共に、旅人が此方を向く。銀糸とも白糸ともつかないその髪は、ただただ美しかった。

「私は水元<sup>みずもと</sup>幽夜<sup>ゆうや</sup>。良ければ君の名前も教えてくれるかな？」

微笑みながら自分の名を名乗る女性……水元さん。それにすられて自らの名前をポロリと零してしまった。

「赤瀬<sup>あかせ</sup>……<sup>なきひと</sup>凧人<sup>たこひと</sup>」

「凧人ね、よろしく」

箒は何時の間にか地面に落ちて、代わりに水元さんの手が収まる。暖かい筈の手なのに、何故だかとても冷たかった。

そうして、僕は出逢ってしまった。

僕のこれからの運命を大きく狂わせる存在に

#### 004：帰り道、帰る場所にて（後書き）

やっとこさ主人公のフルネームが出せたー

まあなんとなく分かるでしょうけどアレです、うん

ここまで読んでくれた方ならスルースキル位持つてるよね！

005：月下の閑話（前書き）

あがががが

スランプって怖い

## 005：月下の閑話

夜の本堂には明かりらしい明かりは無く、隙間から切れ切れに入り込む自然の光のみが頼りとなる。幼い頃から叩き込まれた瞑想紛いをやるにはとても丁度良い。

像の前を陣取り胡座を搔く。座禅の方が良いのかもしれないが、生憎と身体が硬いのでそこまで足は動かない。

「……………」

ピン、と張り詰めた空気を徐々に解して身体の外へ。足先、指先、筋肉から力を抜いていく。

「……………」

唯一残ったのは身体を支える背骨の緊張と、言い様の無い渦巻く力。自由に使えないその力の動きを理解し、手足に少しずつ伝えさせる。

「……………」

バラバラになった四肢にか細い糸を通し繋げ、綿を入れていくイメージ。身体を作り直すこの感覚は、何時になっても慣れない。

……………いや、昔を思い出すから、だろうか。

「あら、面白い事してるのね」

「ッ!？」

紛れた雑念を振り払うと同時に掛けられる澄んだ声。

「……………幽夜、さん」

「うんうん、ちゃんと名前で呼んでくれる様になったわね」

昼間とは違ってTシャツと短パンと言うラフな格好の水元幽夜。銀色が印象的なストレートヘアに月光が透け、昼間とは違う雰囲気醸し出している。

よいしょ、と断りも無く隣に座り、座禅の真似事を始めた。禅は仏教だったかな。そもそも神道でも瞑想するのかすら知らないけど。

「そんな真面目な顔にならなくても。こうやって座ってるだけでもいいじゃない？」

そう言って手を合わせる幽夜さん。僕と幽夜さんの前にある像……一応、神様の姿を彫ったらしい木工像に対してなのだろうけど、南無南無言ってる相手に御利益あるかは分からない。

「……………幽夜さん」

「なに？」

再び目を瞑りながら質問し、目を瞑りながら返答される。

「鍵を返して貰ってない」

「あ、そうだったわね」

チャリン、と前で金属が置かれる音がした。正直な所、鍵なんて



無くていいんだが、やはり他人に持たれているのは不快だ。

「なんで人の家に勝手に上がり込んだんですか？ 参拝なら本堂に行けばいいし、僕を待っていたなら玄関の前で待つなりあったでしょう。不法侵入ですよ」

「……懐かしかったから、って言って信じて貰える？」

懐かしい？

「私には昔の記憶が無い、って言ったでしょ？ 多分思い出せてないだけなんだろうけど、そんな過去が無い私がこの場所を懐かしんだ。だからちよっと抑えきれなくて……まあ、犯罪には違いないけどね」

本人曰く、記憶には四つのプロセスがあると言う。

銘記：新たに得た情報を纏め、

保存：その纏まった情報を脳内に保管し、

再生：保管した情報を見返し、

再認：得ている情報と得た情報と比較し、相違点等を確認する。

この四要素の内彼女、水元幽夜は『再生』に一部欠損があるらしい。

なんでも、十五年以前の記憶が全く思い出せないとか。目が覚めたら川辺に引つかかってて、そこから当ても無く彷徨っている、と言っていた。

「懐かしいって事は、この神社に来た事があるって事ですか？」

「ある……んだろうけど、どうも駄目ね。あの人形に触れた時には一瞬戻りかけたと思うんだけど」

人形……倉庫の肥やしになってたガラクタのデッサン人形擬きが、まさか動き出すとは思わなかった。鉄製の癖にめつきり錆びないのは怪しいとは思っていたが。

「良かったら差し上げますよ、あんな人形。あっても邪魔なだけなので」

「なら、遠慮無く頂くわ」

遠慮なんてこの人間には存在しないだろう。こっちが状況を飲み込んでもない間に宿も飯も面倒を見る事を決めさせるなんて、普通出来ないし道德的な面があるならしない。

……女性が若い男の家に泊まる、ってのはどうなんだろう。胸部を除けば万人に通用する美人だとは思うのだが、本人にそう言う自覚があるのかは分からない。もしくは分かかっててからかってるのか。

「代金は身体で、とか言っても無駄だからね。そんじょそこの男ならはり倒せる自信はあるから」

……どうやら理解した上の行動の様だ。

その後、瞑想してるフリをして寝ていた幽夜を布団まで引きずる羽目になったのは余談。

ナニをしたとかそう言うのは天地神明に誓って無いとだけ言うておくのは蛇足。

## 005：月下の閑話（後書き）

短いですが出さないと何時までも出せない気がした  
あーちくしょー

006：記憶録（前書き）

話がちんたらしてます

## 006：記憶録

隣で傘を構える女性。  
血泥で汚れ眠る子供。  
黒と橙に染まる風景。  
水底から見える青空。  
濃霧が掛かった河辺。  
黒い線だらけの世界。

この六つが、私に残った過去。この六つこそが私本来の記憶。  
だけど、何故だか。この記録がとても忌みしく感じる時がある。

思い出したい／思い出すな  
大切なモノを／不必要なコトを  
穴を埋める為に／傷を広げない為に

「人間かしら？」

「妖怪だと思っけどなあ」

「人間にしては、だけど妖怪にしても……」

「……………」

またもや三人＋独りの状況。秘封倶楽部活動二日目は、ある話題で持ち切りになった。

切欠は宇佐見さんが発見した手記。何が書かれているかと思えば、ミミズがのたくった様な 現代人が見ても、恐らく当時の人が見ても解読不能である文字が書かれているだけだった。

なんとか単語を予想しながら読み進めてみると、どうにも『妖怪』としか読めない単語が多い。昔の宮司がお祓いでもしていたのかもしれないが、それにしても『妖怪と酒を飲む』だのフレンドリーな記述が多い。

問題は、書き散らかされた日誌

鬼に会う

月を攻める

西行寺へ行く

赤瀬に会う

人形を作る

その中に一文、『八雲紫が漸く

幻想郷を作る』とあったのだ。

「『八雲紫』……ハチウンムラサキ？ ヤクモムラサキ？ 変な名前」

「ムラサキじゃなくて別の読みがあると思うけど、この人物が幻想郷に深く関わってるのは確かみたいね。……それと、この『水元鉄生』も」

手記の筆者、水元鉄生。奇しくも幽夜さんと同じ名字であるこの人物も又、謎に包まれている。

あの人形も含め、蔵にあるほぼ全ての品を作り、その上蔵を作っ

たのもこの人物らしい。幾らなんでも嘘っぱちだろうが、どうやら水元鉄生がかつてこの神社においての権力者であったのは間違い無い様だ。

だが、気になるのはそこじゃない。

「……『漸く』……」

漸く。やっと、と同意の言葉。つまり、やっと幻想郷を作った、と言いたいのだろう。勿論この単語が解読間違えなら何ら問題無いし、『八雲紫』が前々から言っておきながら実行せずやっと、と言う意味なら良く分かる。

だけれど幻想郷の記述はこの一文しか無い。もし前々から話があったのなら、他にもそれらしい事を書いているのでは無いだろうか。なら、水元鉄生は予め『幻想郷』が作られるのを予測していた……？

(……ま、僕には関係無い、か)

神社について気にならないと言えば嘘になるが、どうせ出て行く我が家について知った所でどう出来るか。精々謂われを語るに語って値を釣り上げる位だ。口下手な自分に何か益があるとは思えない。そつと席を立ち、空になった湯呑みとお茶請けの皿を持って台所へ行く。

人形を触れた時、脳裏に過ぎつたのは一人の男。一本に結った銀髪を揺らしながら刀を振り回す、黒い袴を着た男。

まるで流れる水のように滑らかな一挙手一投足。同じ動作は一つも無く、気儘に駆ける変幻自在な風。

男と対峙した人形の見た景色は、私の の中に留まっている。

きつとこれは記憶でも記録でも無い、只の残り滓。戯れが偶々残ったモノ。それでも貴重な事には変わらない。

きつと、もつと想いが強いモノがあれば 或いは、こ

の喪失感が無くなるのでは無いだろうか。



006：記憶録（後書き）

笑いを取ろうと思って書けない文って意外と書き辛いなあ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5350x/>

---

東方災生変

2011年11月23日13時24分発行